

特集 祭頭祭

溝口郷 730日の歩み



春の訪れを告げる鹿島神宮の祭典「祭頭祭」



①②色鮮やかな衣装に身を包んだ囃人が、溝口地区を廻り祭頭囃子を披露する「廻り祭頭」(2020年2月23日) ③2019年3月9日、溝口が当番区に選出される。この日から溝口郷の祭頭祭が始まった ④1年間の加護を願って執り行なう水神社での降神祭(2019年) ⑤大豊竹が1年間無事に育つよう注連縄を廻し幣束を立て、お神酒を注いで祈る大豊竹注連縄掛(2019年)



②

差荷状
右方大頭
大豊竹の
祭頭祭を以
て奉納す
神慮卜定候事
享徳三年三月九日
鹿島大神宮
三宅正剛



④



⑤

毎年3月9日、唯一無二の華やぎと賑わいで春の訪れを告げる祭頭祭。2020年の当番区となつた溝口郷は、コロナ禍による延期を乗り越えて大役を果たしました。今回は祭頭祭をより深く知るために、溝口郷の取り組みとともに紹介します。

春を告げる勇壮華麗な祭り

色鮮やかな衣装に五色のたすきを掛け流した囃人。円陣を組んで6尺(約1.8m)の檜の棒をガシッガシッと打ち合わせながら威勢よく囃し、太鼓を打ち鳴らし、高々と掲げたばれんを豪快に振り回し、勇壮で華やかな行列が練り歩きます。

鹿島地方に春の訪れを告げる祭頭祭は鹿島神宮の最大規模の祭典で、1976年(昭和51年)に国選択無形民俗文化財に指定されました。

その起源は、奈良時代に九州へ旅立つ防人の「鹿島立ち」をなぞらえたものとされ、祭頭祭(出陣の神事)、祭頭囃(凱旋の神事)、春季祭(卜定の神事)からなります。現在では五穀豊穣や天下泰平を願う祭りとして地域に根付いており、囃子歌の「イヤートホヨトホヤア」を漢字で

「79年ぶりのため当番字を経験した人が溝口におらず、当初は辞退に傾きつつありました。でも私自身、以前から祭りこそが地域の絆の源だと感じていたので、まず20代から40代の若手に声を掛けてみたくです。誰しも仕事や家庭で忙しいのは分かるけれど、将来的に子どもたちが帰ってきたくなる溝口にするため、祭頭祭に挑戦しよう。そう訴えると、みんなが賛同してくれました。それから区長や長老の皆さんに気持ちを伝え、いよいよ動き出すことになりました」

祭りの準備を支えた人の絆

まず溝口郷祭事委員会を立ち上げ、仲内清治さんが委員長に就任。その後、溝口の鎮守社である水神社に鹿島神宮の御分霊を迎える降神祭、大総督を務める5歳前後の男の子の選定、大豊竹の選定などの行事が続きます。さらに、ばれんや提灯など道具の準備、衣装の用意と着付けの段取り、囃人の組織編成、祭頭囃の練習、寄進集めなど



三宅事務局長 仲内委員長

表すと「礼豊穂豊穂弥」で、まさに豊穣への祈りが込められています。



鹿島神宮祭頭日中之図(所蔵：歴史民俗資料館)

ぎやかな祭頭囃が真っ先に思い浮かびますが、その裏ではなんと1年がかりで準備が進められ、たくさんの方の熱意が注がれています。

溝口郷、79年ぶりの決断

当番字とは、祭頭囃を奉納する大役を担う地区のこと。鹿島神宮を中心とした52の氏子地区から、春季祭の下定で毎年2地区(南北各1地区)が選ばれます。当番字が回ってくるのは20年から30年に一度。大変栄誉なことですが、鹿島開発など時代とともに地区の戸数や人々の生活・意識が変化し、辞退する地区も出るようになってきました。実は溝口も2回続けて辞退していましたが、79年ぶりに当番字を受けることを決断。その思いを、溝口郷事務局次長を務めた三宅正剛さんに聞きました。

挙げればきりがありません。



祭頭囃を練習する子どもたち

「こんなに準備が大変だとは思いませんでしたが、当番字の経験がある日川、萩原、奥野谷の皆さん、着付けをしてくれた皆さんなど神栖市の多くの方が支えてくださいました。また一番の難問であった資金についても、企業や他地区のご理解も得て500件を上回る寄進をいただきました。もう一つ大きな励みとなったのは、集まりを重ねるごとに溝口地区の結び付きがどんどん強くなっていくのを実感できたことです」

廻り祭頭の後で突然の延期

年が明けて2020年1月18日、大総督を務める山本開琉君(6歳)が鹿島神宮に初参拝しました。続いて、2月23日には廻り祭頭を実施。これは溝口地区の神社、大総督の家、学校などを廻り、地区の皆さんに本番さながらに祭頭囃をお披